

東北電力・中学生作文コンクール 高橋(杏)さん 佳作！

☆ 第46回中学生作文コンクールには、東北6県と新潟県の399校から1万6903点の応募があり、佳作56点の中に高橋(杏)さん(2年)の作文も入りました。

3, 2, 1 アクション！

「俺は楽しく過ごしたい」

そう強く思うようになったのは中学生になってからだ。その頃の僕は、学校でも、家でもどこかさびしく、むなしさを感じていた。

入学するまでは学校に行くだけで幸せ、楽しいと感じられると思っていた。そこにいっただけで友達と笑い合える、そんな、理想を抱いていた。最初はそんなもんだ。誰でもこんな理想を思い浮かべるだろう。けれど、現実には違った。そんな理想をもたなければ良かった。そんな風に思うこともあった。それぐらい理想と現実の違いに衝撃を受けていた。毎日無気力、虚無感を感じていた。なぜだ。なぜだかわからない。どんなに考えてもその頃の僕には答えを見つけられなかった。「楽しく生きたい」という自分の夢からは考えられないくらいの生活が続いた。

「なぜだろう。なぜ楽しくない。学校に行きたくない。なぜ俺は、生きているのだろう。」

自分に投げかける疑問はどんどん莫大に、そして辛辣なものになっていった。

「あいつのせいだ。」「こいつのせいだ。」と人のせいにしていれば心が軽くなるような気がした。「これじゃいけない」そんなこと分かっているけど、そうしないと生きてゆけない、そんな気がした。気がするだけで十分だった。

そんな生活の中、僕の唯一の楽しみであり、心の支えとなってくれたのは、あるシンガーソングライターの歌だ。彼の曲は何度聴いても僕の心にそっと寄り添ってくれた。楽しくない学校から帰った後、布団の上で目を閉じる。そして、いつもの曲を聴く。リラックスなのか、現実逃避なのかよく分からないけれど、それが僕のルーティンとなった。実に心地良かった。反面、ふと不安に襲われた。「俺は彼がいなくて生きてゆけないのか。」

と胸がざわつきはじめた。

そんな時、新型コロナウイルスが流行し始めた。感染予防のために日本中が1ヶ月間の自粛。正直ラッキーだと思った。楽しくもない学校に行かなくていいなんて。しかも1ヶ月も。こんなことがあっていいのか。その日僕は、胸を踊らせて帰った。その一方で、「学校にいけない？」と心に引っかかりを感じているような自分もいた。

自粛が始まって2週間が経過した。「友達に会いたい。学校へ行きたい。」そんな思いが、日が経つごとに強くなっていく。

自粛が明けて、初の登校日。1ヶ月ぶりに友達に会う。

「楽しい。面白い。」

友達と一緒に何かすることが、何もかも楽しいのだ。僕はかけがえない瞬間を味わったのかもしれない。いっただけで楽しいとはこのことだ。ついに見つけてしまった。

自粛期間中、僕はいろいろ考えた。「どうすれば楽しめるのか」しかし、考えれば考えるほど自分を苦しめる。当たり前だ。答えなんか出るはずがない。むしろ答えなんかない。布団の上で天井を見上げながらただ考えている。本当に何もしていない。楽しい、楽しくないを、何かをする前から決めていた。食わず嫌みみたいなものだ。自分で楽しいと思える可能性を狭めていた。挑戦する心を忘れていたようだ。新しいことに挑戦しなければ、可能性の幅は広がらない。自分から行動を起こさなければ現状は変わらない。何でも良かった。何か行動すれば良かったのだ。それなのに何もしない自分。「何やってんだ、俺。」

自粛が明けて自分の中に自分なりの答えが出た。

僕は一人で抱え込みすぎたようだ。友達に頼る。先生に頼る。家族に頼る。このことを忘れていたようだ。頼ることはダサい。でもそんなプライドは捨てた。度が過ぎていた。頼りたいときに頼ればいい。そう考えたとき、すっと心が軽くなった。そして、実感した。

「素直な心が一番なんだな。」

今、思い返せば生きていることさえ楽しくないと思っていた中学校一年の頃。その時は面白くないものを面白いと言っていた。笑えないことでも愛想笑いで何とか自分を騙していた。嫌われないように頑張っていた。他人にも自分にも嘘をついていた。

小学生の頃、僕は嘘つきだった。怒られるのが怖いから嘘をついた。自分がしたことをしていないと言った。でも嘘はすぐにばれ、その度に失望された。そんなことになるくらいなら全部ありのままに話してやろうと思った。ありのままに話して怒られたとき、なんかすっきりとした気分になった。あの時と似ている。これが成長というものなのか。

これから僕は、「素直な心」「楽しむ心」「自分に嘘をつかない」この三つの価値観を大切に生きてゆこう。そう決めた僕はもう人生の路頭に迷わない。